

能楽師・観世流シテ方

中森健之介 君

【なかもり けんのすけ】

2009年総合政策学部卒業。幼少期よりシテ方能楽師である祖父・中森晶三、父・中森貞太に師事し、数多くの能舞台で子方を務める。大学卒業後、観世喜之、喜正のもとで修行を重ねた。2018年に観世流シテ方の準職分の資格を得て玄人(プロ)の能楽師となる。公益財団法人鎌倉能舞台評議員であり、祖父が創設した「鎌倉能舞台」を拠点に舞台活動のほか、一般の人々への能のお稽古なども行っている。これからの能楽界を背負う期待の若手能楽師の一人である。



能楽の革新者だった祖父。 遺志を継ぎ、能の魅力を幅広い世代に伝えたい

舞台後、必ずほめてくれた 祖父と父

——中森さんは、鎌倉の大仏のすぐそば、緑豊かで閑静な環境の中に建つ「鎌倉能舞台」を拠点に活動されています。この能楽堂はおじいさまが創建されたとか。

中森 はい、祖父はもともと能楽の家に生まれたわけではありません。「旧制一高」、現在の東京大学教養学部在学中に女性能楽師のバイオニアである津村紀三子さんに手ほどきを受け、そのまま能楽師の道へと進みました。能楽師としてはそうした特殊な経歴もあって、とても自由な考えの持ち主でした。「弟子や関係者だけでなく、もっと多くの方々に能を見ていただきたい」。そんな思いから祖父は数々のチャレンジをしました。中学校・高等学校を回って生徒の前で能を演じたり、神奈川県内の数々の新能創設にも関わりました。そうした取り組みとともに地元鎌倉に能楽舞台を建設することが祖父の念願で、奔走の末、1970年にようやくその夢をかなえることができました。以来、半世紀以上続けてきた能を披露する前に解説を行う鎌倉能舞台の公演スタイルを考案したのも祖父です。残念ながら2008年に亡くなりましたが、

コンピュータ音楽やスモークなどを使った「エレクトロニクス薪能」に挑戦するなど晩年まで創意工夫の人でした。父も私も「もっと多くの方々に能の舞台を見ていただきたい」という思いは同じです。現在では舞台脇にモニターを配し、そこに現代語訳と英訳を映し出して誰もが能舞台を楽しめるよう工夫しています。また、平日にはここで一般の方々を対象にした能のお稽古もしています。敷居が高い古典芸能と思われている能ですが、実はどなたでも習うことができるのです。

——中森さんが初めて舞台に立たれたのはいつですか。

中森 初舞台は2歳9カ月。もちろんまったく覚えていません。おそらく舞台では祖父が後ろから支えてくれていたのでしょう。その後は、遮那王（源義経の稚児名）などさまざまな子方で舞台上に上がりました。最近、甥が初舞台を踏んだのですが、それを見ながらかつての自分もあんな感じだったのかなとはほほ笑ましく思いましたね。初シテ（仕手）能の主役のこと）は6歳のときでした。

——ということは物心ついた頃から能のお稽古をされていたのですね。

中森 はい。幼稚園や小学校から帰宅す

ると、毎日父や祖父から10〜20分くらいのお稽古をつけてもらっていました。能のお稽古は謡本うたいほんという本を見ながら声を出す謡うたいと、舞台の上で身体の動きを習う仕舞しまいがあります。まだ謡本が読めない小さい頃などは、父が謡うのをオウム返しにまねて練習していましたね。

——意外とお稽古時間は短いのですね。

中森 ええ、祖父も父も私が能を続けてくれることを願っていましたから、子どもが嫌がらない程度の時間でお稽古するように心がけていたのです。一つの舞台に対しておよそ半年かけて稽古しますので、1回の時間は短くても大丈夫でした。そして祖父と父は本番の舞台後には必ずほめてくれました。失敗しても「よくできたね！」と笑顔で迎えてくれたものです。それも子どもが能を嫌いにならないようにという心遣いからでしょう。わが家はシテの家ですが、特にワキ方（シテ



「シテ」がつける能面は、左右もしくは上下に少し傾けるだけで微妙な感情を表現できる

の演技を引き出す脇役。僧や神職などに扮する）は人数が少なく、能楽の世界では後継者を育てることはとても大切なことです。その後、大学生までは父と祖父が私の能楽の師となりました。

SFCで学んだ心理学は 舞台づくりのヒントに

——SFCの総合政策学部へ進学された理由は。

中森 将来、能楽で身を立てるにしても大学レベルの勉強はしておきたいと思いました。SFCは父が湘南藤沢中等部・高等部で講師をしていたことで親しみがありましたし、鎌倉の自宅から通学しやすいことも良かったです。調べてみるとカリキュラムがフレキシブルで能のお稽古や舞台との両立もしやすいと思いました。大学では経営学やデータ分析の授業などを中心に履修し、いんなんいちろう印南一路教授の研究会で意思決定の心理学について研究しました。心理学には能の登場人物の理解や舞台づくりなどに役立つヒントがたくさんあって、とても興味深かったですね。

実は大学卒業を控えて少し迷いがあり、就職活動もしていました。しかし最終的にはやはり能楽師の道を選ぶことを決めました。なにしろ私にはこの鎌倉能舞

台をはじめ、父と祖父という師もいて能楽を学ぶために非常に恵まれた環境がそろっています。そしてなにより私は子ども頃から続けてきた能楽の世界が好きでした。大学卒業後は父の師でもあった東京の観世喜之師家に住み込みの内弟子に入って6年間修行させていただきました。独立して鎌倉に戻ってきたのは2016年のことです。

——プロの能楽師として取り組んでいきたいことはありますか。

中森 やはり祖父が目指したように、多くの方に能楽を楽しんでいただける工夫と環境づくりに取り組みたいですね。「お客さまが心から楽しめる舞台」を目指して試行錯誤していきたいと考えています。今年、鎌倉能舞台にもたびたびご出演いただいている狂言師の野村萬斎さんが演出を担当し、出演もされていた「能狂言『鬼滅の刃』」が話題を呼びました。登場人物やストーリーをあらかじめ知っていることは能楽鑑賞では大切なので、こうした人気アニメを題材とした舞台は能を多くの方に知っていただくためには極めて有効だと思います。それと同時に400〜500年という時間に磨かれた古典作品の素晴らしさも知っていただきたいです。能舞台にあえて現代語訳・英

訳を映すモニターを設置したのも、そうした古典の素晴らしさを少しでも多くの方に理解していただきたいからです。

観阿弥・世阿弥親子が能楽を大成して以来、武士の教養として時代とともに変転してきました。正式な能楽は「五番立て」といって、冒頭の「翁」に始まり、「神・男・女・狂・鬼」という5つの「番組」と狂言4曲で構成されてきました。ちなみに放送などで使われる番組という言葉はもともと能・狂言用語です。「五番立て」をすべて演じ終えるには日の出から日の入りまで終日かかり、照明がない時代です。現代では今よりむしろ早かったようです。現代ではこうした1日がかりの上演

は能楽協会が主催し、シテ方五流が一堂に会する「式能」以外ではめつたにありません。能と狂言1曲ずつの上演がほとんどで、私たちの定期公演では、現代のお客さまにも古典の素晴らしさをより深く理解していただくために、その冒頭にストーリーの背景やみどころなどの「解説」の時間を設けています。

——シテ役として得意とする曲、好きな曲はありますか。

中森 去年、シテとして一人前と見なされる「道成寺」の舞台をつとめましたので、今後さらさら難しいといわれている曲に積極的に取り組んでいきたいと考えています。できればすべての曲を得意としたいのですが、能楽師として大柄な私の場合、先ほどの「五番立て」でいうと繊細さが要求される「女」の曲には少々苦手意識があります。その反対に荒々しさを表現する「男」や「鬼」は比較的得意としているかもしれません。だからこそあえて「女」の演目に積極的に取り組みつつ、自分なりの「女性の柔らかさ」を表現できるように、



演目「道成寺」より 写真：駒井社介

日々精進しています。幸い私にはこの鎌倉能舞台という拠点があり、由緒ある衣装や能面もありますから、ここでお客さまを前に真剣勝負の場数を踏むことで、自分の芸を磨いていくことができると信じています。

古いものに立ち返ることで イノベーションが生まれる

——新型コロナウイルス感染症拡大以降、能楽の舞台も中止になるなど苦しい日々もあったと思います。

中森 この2年ほどオンライン公演の可能性についても模索してきました。2020年には、父が発起人となってジャズやクラシック音楽、雅楽、紙芝居など多彩なジャンルの地元アーティストが出る地域オンラインイベントを鎌倉能舞台で開催したこともあります。今やほとんどのご家庭にリモート環境があるわけですから、私たちはこのピンチをチャンスに転換すべく、動画配信などで多くの方々に能に触れていただく機会を提供していきたいと考えています。リモートでしたら国境も関係ありませんので、海外の方々を対象にした動画制作・配信、さらに能のお稽古などもできます。

私は祖父にもっと長生きしてもらいた

かったとつくづく思います。先ほどお話した通り、祖父は能楽師仲間から「あの人は25年先を行っている」と驚かされていたほど先進的な人物でした。生きていたら能楽の未来について相談したいことがたくさんあります。しかしそんなことを嘆いていても仕方ありません。まだまだ能楽が敷居の高い存在と考えている人が多い中、祖父の遺志をしっかりと受け継ぎ、父と私でその敷居を低くするためさまざまな工夫を公演に取り入れていくつもりです。実は最近、幅広いジャンルのミュージシャンが鎌倉能舞台の雰囲気や気に入ってくれてコンサートを開催してくれているのです。そういうところからも能や能舞台の魅力が幅広い世代に伝わってくれるとありがたいですね。



——最後に塾生へのメッセージをお願いします。
中森 古典芸能の継承者として、伝えたいのは、古いものにも目を向けてほしいということ。若

い頃は誰しも新しさや先進性に憧れます。それはそれで正しいことだと思います。日々、時代の最先端に触れていたSFC時代の私だってそうでした。だからといって古いものが無用かといえば、そんなことはありません。古いものに一度立ち返ることで新しい展望やイノベーションが生まれることは決して珍しいことではありません。能の舞台には感情や運命に関する数百年にわたる人間の知恵が宿っており、そこから現代を生きる私たちにとつても学ばべきことや指針を読み取ることができるとしよう。能楽の普及を通して、そうした新しい時代の活力になることができればと考えています。

そしてもちろん、多くの塾生の方にも能楽の魅力を知っていただきたい。まずは動画サイトなどでも結構です。少しでも興味を覚えたなら、次の段階としてぜひ能楽堂に足を運んでみてください。きっと生の舞台ならではの空気感や音の響きなどに驚かれると思います。鎌倉能舞台には能面や装束を展示した能楽博物館があり、土日と木曜日（臨時休業あり）のカフェ営業も始めましたので、鎌倉散策の折にはお気軽にお立ち寄りください。大歓迎いたします。

——本日はありがとうございました。